

靴の歴史散歩 ⑥1

皮革産業資料館 常任委員 稲川 實

戦後復興の願いを込めて、昭和24年(1949年)に再建された西村勝三の石像前では、靴の記念日(3月15日)に合わせ、毎年東靴協会主催による、祈念祭が行われるようになった。

昭和24年といえば戦後の混乱期で、皮革は統制下にあり、食糧難や住宅難も、まだまだ解消されていない時代であった。そんな時代に、石像とはいえ再建を成し、祈念祭まで行っていたことに、同業先人の逞しさと、復興への心意気を感じられて感動を受ける。

ちなみに、統制が撤廃され、皮革やその製品が自由に取引できようになったのは、昭和25年(1950年)5月12日からであった。

向島の石像について『靴産業百年史』(日本靴連盟・昭和46年発行)は、以下のように書いている。

「……除幕式以後、毎年この佳日に祈念式が行われた。この催しに感激した西村家では、昭和二十七年社団法人東靴協会にたいして立像のある須崎町の敷地五十坪を同会に寄贈した。

同協会向島支部では、すすんで清掃を受けもってきたが、その後、この環境はかつての浄地の面影を失い、先覚者の遺業をしのぶにふさわしくなくなったので、三十九年神田の合同ビル五階に〈西村記念室〉を新設。新しく胸像を作成して、毎年祈念式をおこなっている。」と、石像のその後の変転にも触れ、語られている。

靴産業百年史と同じ編者、佐藤栄孝の『西村勝三の生涯』(西村翁伝記編纂会・昭和43年発行)の〈附録〉にも、「西村記念室の開設」という項があるので読み合わせてみたい。

また、かつて、銅像や石像を囲むようにしてあった、顕彰碑についての記述もあるので、これを転記したい。

「……なお向島の敷地内にあったレマルシャ

ンはじめ七名の記念碑は、合同ビルに運び入れることは困難であるから、西村翁と関係のあった有力会社に交渉したが、受け入れられなかったため、やむなくこれを整理して売却するとともに、記念碑は撮影し、碑文は浄書して表装の上、保存されることになった。敷地の売却代金は約一千五百万円であったが、これを記念室購入費および胸像製作費、明治以来の靴や文献、書庫購入費に充てた。こうして東京都靴連盟・社団法人東靴協会は、西村記念室を業界人のため永久に保存管理することになった。」と結んでいる。(筆者註・桜組の事業功労者の顕彰碑は、レマルシャン、綾部、海老名、山崎、関根、城の6名だったはずで、この本の七名とあるのは



写真は、墨堤通りの銅像跡地

明らかな間違いなので、これを機に訂正しておきたい。)

刻の流れにプレイバックはないと承知しながらも、6基の顕彰碑ともども消えてしまった桜組の歴史が、惜しまれてならない。

今回は、神田合同ビルの西村記念室を訪ね、昭和39年につくられた胸像や、所蔵の関係史料を取材し、『かわとはきもの』⑥から11回続いた、向島の銅像についての完結としたい。